

第五回世界社会フォーラム(以下 WSF)が 2005 年 1 月 26 日から 31 日にかけて、ブラジルのポルトアレグレで開催された。ポルトアレグレはそれまでも過去 3 回 WSF を開催してきた経歴を持つ。なぜブラジルの一州都に過ぎない同市が WSF のとして 4 回も選ばれてきたか。その理由の一つとして 2004 年まで同市で政権の座にあった労働者党のイニシアチブがあるが、同時にポルトアレグレでは労働者政権のもとで参加型予算システムや連帯経済など先駆的な試みがなされてきた。それらの民主主義の経験と新自由主義に対する闘争によってポルトアレグレは全世界に知られつつある。

ポルトアレグレは人口約 140 万のブラジル南部最大の都市だ。ポルトガル移民に加えて、ドイツ、イタリアなどからの移民が多く、ヨーロッパの都市のような雰囲気を持つ。市の中心部は行政や商工業で活気があり、公共市場では近郊地域の物産が取引されている。住宅地域は緑豊かで快適な空間作りが目指されている。公共交通は発達しており、上下水道などの社会基盤も整備されている。しかし、失業や貧困などの問題を深刻に抱えるブラジルにおいてポルトアレグレもその例外ではない。失業率は高く、市中心には露天商などのインフォーマルな雇用が多くみられ、郊外にはファベラと呼ばれるスラム街が点在している。

ポルトアレグレ市で参加型予算システムが誕生した背景には、そうした社会情勢の外にポルトアレグレとポルトアレグレのあるリオグランデスル州がたどった歴史があると考えられる。リオグランデスル州はガウーショの州とされ、この州の人間はブラジルではどこへ行っても職業に関係なく「ガウーショ」と呼ばれる。時に「ガウーショ」という言葉を「英雄」の意味を込めて使う。何かに長けている男を指すこともある。かつて牛を追って広大なパンパと呼ばれる草原を移動していた時代には、ガウーショたちは常に大自然の危険と隣り合わせだった。そんな中では勇猛果敢な男でなければ生き残れなかった。

リオグランデスル出身の人々は自分たちがガウーショ呼ばれることを誇りに思っている。それはガウーショたちがブラジルで一番豊かな地域だといわれる州を作り上げたからだ。ポルトアレグレは決して理想の都市ではない。しかしながら、ポルトアレグレが他の都市と違うのは、失業や貧困などの問題に行政と市民がともに取り組んできたことだ。

リオグランデスル州は文化的にも政治的にも独自性をもった地域で、リオデジャネイロ、サンパウロ、ミナスジェライスといった南東部の諸州によって支配されてきたブラジル政治の中で孤立してきた州だ。そのことは分離主義を生む一方で、伝統的な南東部に対してブラジルに新しい国家及び社会をつくる政治運動を生む要因となった。

本稿では、第一章でガウーショの歴史をたどったのち、第二章ではリオグランデスル州が生んだ大統領ジェットウリオ・ヴァルガスに焦点をあて、第三章ではガウーショノ街でつくられた民主主義の新たなモデルと言われる参加型予算システムについて説明し、第四章で今後の展望について述べていく。

リオグランデスルのたどった歴史によって高い政治意識をもった市民と労働者、自立心と連帯意識をもった生産者、それらを支援する政治家が生み出された。それらが今日の

ポルトアレグレにおける参加型予算システムにつながっていったのである。

ブラジルの労働者党は、「市民が社会の意思決定の場面でより大きな役割を果たさない限りは、社会秩序は回復しない」という信念を市政の中で実現できる方法を模索した結果、市民の意思決定への参加を保証するしくみとして、市民が予算編成に直接参加する参加型予算システムが考案されたのだ。ガウーショの街から生まれた参加型予算システムは、ブラジル内外での広がりをみせている。南米では、ペルー、エクアドル、ボリビアでの試みが始まり、ヨーロッパでも、スペイン、イタリア、ベルギー、フランス、ドイツで類似したプロジェクトがでてきている。また、日本でも、埼玉県志木市、千葉県市川市、東京都足立区、長野県などで個人住民税の1%相当の使い道を市民が決定する仕組みが導入された。ただし、ポルトアレグレのような成果をあげることができるかどうかは、今後の各自自治体の努力にかかっているといえる。

参加型予算システムの更なる発展とともに、本来民主主義とはどんなものかが問われている。本稿では、ブラジル国内外での広がりについての調査が不十分であった。参加型予算システムの成果と展望を問う意味で、ブラジル以外での広がりには、さらに調査が必要だといえる。

参考文献

小池洋一（2005年）『ポルトアレグレがつくる新しい世界』月刊オルタ
アンドウ、ゼンパチ（1983年）『ブラジル史』岩波書店